



わかば便り 第56号

2017. 3. 31. 発行

脳損傷による遷延性意識障がい者と家族の会「わかば」

第25回日本意識障害学会に参加して

小林 俊夫

第25回日本意識障害学会は、2016年7月22日（金）～23日（土）に、香川大学脳神経外科教授 田宮隆先生を会長として、「あきらめない」というテーマで開催されました。会場は香川県高松市のかがわ国際会議場（タワー棟）とサンポートホール高松（ホール棟）の2つの会場で、わかばの会員の方も10名程度の方が参加されていました。また、7月23日（土）は、第25回日本脳神経看護研究学会四国部会が同時開催されました。

今回の学会も幅広い多くの講演や発表があり、私はそれぞれの会場を行き来しながら聴講しました。その中で私なりに理解できたり記憶に残ったシンポジウムや講演(◆)と一般演題の発表(◇)を学会抄録集より抜粋しながら報告させていただきます。

◆基調講演 埼玉医科大学総合医療センター 松居徹先生 「慢性期意識障害評価スケール作成に向けて」

急性期の意識障害には万国共通の評価スケールがあるが、慢性期の評価スケールに関しては、画一化した物差しがないのが現状である。2012年以降、学会主導で慢性期意識障害評価スケール作成に向けて議論を重ねてきた。今後は、参加施設を絞り評価法の確立に努めていきたい。調査項目は以下項目の記録と解析であり、この評価システムの構築が今後の本学会での大きな使命となる。

1. 患者プロフィール
2. 暫定的な意識障害の分類（正常、①軽度、②中等度、③高度、植物症）
3. 上記①②③の細分化
4. 経時的な種々の指標（診断、治療・リハ・看護の介入、NASVA認知、行動評価）

この評価法の目的は、発症後どの時点でどのような状態であることを客観的で明確に評価することができ、しかも将来的にどの時点でどの程度まで回復するかを予知する可能性を探求することである。

◆シンポジウム1 「慢性期意識障害に対する新たな試み」

・千葉療護センター脳神経外科 八巻智洋先生 「当院における重症頭部外傷後遺症患者の評価方法の再検討」

重度の脳損傷に伴う患者を「遷延性意識障害重症度評価表（NASVAスコア）」及び

全体を通じた感想としては、講演等においては用語も含めて内容が難しく感じるものも多かったのですが、治療やケアに関して直ちに試してみたい方法もありましたし、新たな治療方法などの今後の展望も知ることができ、充実した2日間でした。

次回ですが、2017年7月8～9日に富山市で「意識障がい治療の新たなアプローチ」をテーマとして開催されるそうです。



あすぷろ実行委員会の取材を受けて

福寿 陽子・弘明・事務局

わかば会員の福寿さんからわかば事務局へ下記のメールが届きました。

先日青森ねぶたに参加し、飛行機を利用したのですが、その模様をあすぷろ実行委員会という障がい者支援団体さんが取材し、ホームページに載せてくれました。

飛行機での旅行を検討されている方の参考になるかもしれませんので、よろしければ会報で紹介して下さい。よろしくお願いします。

早々にわかば便りへの掲載をしたいと思い、あすぷろ実行委員会へ連絡を取りました。

「うれしいメールありがとうございます。ぜひご紹介ください。JALの方々にも喜んでいただけたと思います。」というお返事をいただきましたので、あすぷろ実行委員会の取材報告を掲載させていただきました。尚、あすぷろ実行委員会の詳細はあすぷろ実行委員会ホームページをご覧ください。

<http://www.assystarsproject.net/jalpri.html>

取材協力とわかば便り掲載を快く承諾して下さった、福寿さんとあすぷろ実行委員会の皆様へお礼申し上げます。

(後日、福寿さんから「青森のあとは沖縄に行きました。障害があっても旅行を楽しみたいと思っている方に知ってもらいたいです。」とメールをいただきました。)

あすぷろ実行委員会

「日本航空／プライオリティ・ゲストサポート」より 重度の障害者への対応

8月2日羽田から青森にJALの飛行機と一緒に乗られる、重度の障がい者である息子さん(20代)のお母様に取材させていただきました。

ケア付きねぶた“じょっぱり隊”という、介護を必要とする障がい者にねぶたを体験していただく催しに参加するため、思い切って、飛行機を今回使用してみたそうです。

前年は新幹線での参加したが、JALのサービスが丁寧だという話を聞き、今回JALの便を予約されたとのこと。

息子さんにとっては初めての空の旅で、羽田空港までと青森空港からは介護タクシーを予約されました。

「わかば」という脳損傷による遷延性意識障がい者と家族の会に参加されていて、そこで知り合った方からJALがいいと教えていただいたそうです。

事故に合ってから4年が経過、症状は少しずつしかよくなっていないようですが、「あせらない、あきらめない」というのをモットーにしていらっしゃいます。いつの日か、再びしゃべったり、歩いたりできるようになったらいいなと思いました。

お母様が多くの人の手を借りて、旅が実現されることに感謝したいと話されていたのが印象的でした。

普段の外出

月に2、3回は外出するようにされているそうです。

一番子どもが喜んだのは新宿のルミネ the よしもとで、前の端の方に車いす専用の席があるとのこと。

地元市のコンサートホールにも車いす席があり、よく利用されるそうです。

TOHOシネマズの映画もよく利用されるとのこと。

外出の際にはエレベーターの場所を必ず事前にチェックされるそうです。車いす用トイレも下見されますが、男女用と別にトイレが独立していないと使えないので、困ることがあるそうです。新幹線以外の電車にはまだ乗ったことがなく、車を利用することが多いとのこと。

外出していて気になるのは、人の目線とポールだそうです。

子どもはある意味、残酷。動物園など子ども多いところには行きたくないとおっしゃっていました。

また、せっかくの遊歩道でも、狭いところの真ん中にポールがあったりすると、それだけで車いすが進めない。せっかく車が来ない遊歩道があっても、そこに行く手前にポールがあったりするのは、本当にかっかりされるそうです。

そのほか、直線のスロープはいいが、切り返しの多いスロープは車いすの通行に不適だそうです。なるほどと思いました。

今後はバリアフリーの宿などを事前に調べて、泊りがけの旅行に行きたいと思うとのこと。

沖縄や伊勢志摩など、バリアフリーツアーセンターに相談できることをお教えしたら、とても喜んでいただきました。

当日の飛行機に乗るまでの流れ



スマイルサポートカウンターで搭乗券の発行などご搭乗手続き後、スペースの奥にある応接室で胃瘻をされて、それから今回のインタビューをさせていただきました。



普段使いの車いすのまま、隣の保安検査場で金属探知機と手荷物のX線検査をして、搭乗口まで空港係員がご案内。



搭乗口では事前改札で機内へご案内。飛行機入口のすぐ手前で、係員2から3名のサポートにより普段使いの車椅子から、機内用の車椅子に乗り換えました。普段使いの車椅子はビニールで軽く梱包します。階段で屋外に出し、2人の係員が手で運び、ベルトローダーを使用して、飛行機の貨物室に搭載します。

今回は機内にも入ることができるフルクライニング型の車椅子で座席までご案内し、座席に移乗していただきます。座位保持が困難なお客さまには上体固定用ベルトの貸し出しがあります。お客さまの上体（胸のあたり）と座席の背もたれを上体固定用補助ベルトで固定し、座位保持をします。そこまでの対応がおわってから、一般乗客のお客さまを機内へご案内します。飛行機は前の便が到着してから50分程度で出発となるため、その間に清掃と出発準備をしてから、事前改札を行う必要があります、大変あわただしいものであることがよくわかりました。

※事前改札：お手伝いの必要なお客さまや妊娠中の方、お子さま連れの方を一般の改札前に機内へご案内します。

上体固定ベルト

上体固定ベルトはフェルト素材でマジックテープにより脱着するものです。事前のお申込みが必要なので、早めにプライオリティ・ゲストセンターに連絡することをお勧めします。

また普段使用している補助シートも機内で使用できる場合があるそうです。ただし、ご搭乗便の座席に装着可能かどうかはJALの専門部署に事前の確認が必要とのことですので、相談してみてもいいでしょうか。